

●アップフィールドギャラリー企画展「ながめる まなざす」

ながめるまなざす

NAGAMERU MANAZASU



- アップフィールドギャラリー企画展「ながめる まなざす」
- Director 渡 雅博
- DIVISION-1** 2010年5月14日(金)～6月1日(火)
- DIVISION-2** 2010年6月4日(金)～6月22日(火)
- DIVISION-3** 2010年6月25日(金)～7月13日(火)

DIVISION-1

相馬 泰 Yasushi Soma

1962年 東京生まれ。
日本大学芸術学部写真学科卒業。
00年代に海外で写真的在り方に興味を持ち、
東京及びその周辺で撮った写真をブログで發表し続ける。
東京の旅 http://nifijyou.exblog.jp/
Slice of Life http://d.hatena.ne.jp/dannoutoueji/
グループ展
2009年「LAND SITE MOMENT ELEMENT」UP FIELD GALLERY

横澤進一 Shin-ichi Yokozawa

1968年 東京都生まれ。
1989年 阿佐ヶ谷美術専門学校卒業
2009年 作品集「Bat's Posture」: Tokyo Art Book Fair ZINE'S MATE
2009年 parapera show : AISHO MIURA ARTS
2009年 川上千景: アートギャラリー・アトリエ
2007年 インタビュー WEB 写真界隈: http://dc.watch.impress.co.jp
PURR http://slyr.exblog.jp

DIVISION-2

村越としや Toshiya Murakoshi

1980年 福島県須賀川市生まれ
2009年 東京、清澄白河に「TAP」を設立
写真集
2009年「浮葉」TAP
2008年「草をふむ音」音野舎
2006年「あみあみ」音野舎

DIVISION-3

荒木一真 Kazuma Araki

1983年 山形県生まれ
2003年 日本写真芸術専門学校卒業
個展
2008年「outline」MUSEE F
「transfer」東京写真月刊 MUSEE F 選抜展
2005年「front page」appel
グループ展
2008年「TAMA WANTS IT 2008『イメージの種子』」
多摩美術大学/みなとみらい駅地下二階コンコース
2007年「キーフォンダーカー」2007 東京都現代美術館

箱山直子 Naoko Hakoyama

1976年 神奈川県生まれ
1998年 玉川学園女子短期大学教養科卒業
2000年 東京総合写真専門学校第二学科卒業
2002年 東京総合写真専門学校研究科卒業
2009年「New Garden」表参道画廊(倉石信乃企画展)
他、個展・グループ展多数

協力=合衆会社 芸力 http://geiriki.com/

UP FIELD GALLERY
〒101-0061
〒101-0061
東京都千代田区三崎町3-10-5
第3原ビル304
tel/fax.03-3265-0320
e-mail: office@upfield-gallery.jp
http://www.upfield-gallery.jp
●JR総武線・水道橋駅、西口 徒歩3分
●地下鉄・半蔵門線、九段下駅(出口5) 徒歩10分

西山功一 Koichi Nishiyama

1968年 横浜生まれ。
2009年 ワークショップ・カタログ
1992年 Bセミスクーリングシステム修了
個展
2010年 6月 ギャラリー工房観
9月 アートレスギャラリーで予定
http://www.koichi-nishiyama.com/

吉村 朗 Akira Yoshimura

1959年 福岡県門司生まれ
個展
2005年「夜霧・ORDER」再春閣ギャラリー
2004年「is-mono」IKAZUCHI-photographers' gallery 別室
2001年「ジノノラム」ギヤリードルクス ソウル
グループ展
2009年「LAND SITE MOMENT ELEMENT」UP FIELD GALLERY
2009年「第一回朝日フォトエッセイー 386 異代」
日本大映写真部日本文化院・ルクセギャラリー ソウル・他
1995年「現代の真的像 1995 another reality」川崎市市民ヨージアム
他、グループ展・個展多数

Koichi Nishiyama

Akira Yoshimura

Yasushi Soma

Shin-ichi Yokozawa

山方 伸 Shin Yamagata

1973年 会津生まれ。
1996年 高知大学理学部生物学科卒業
個展
2007年「over the river」コニカミノルタプラザ
2005年「bee fly」コニカミノルタプラザ
グループ展
2009年「LAND SITE MOMENT ELEMENT」UP FIELD GALLERY
2008年「Invisible moments」UP FIELD GALLERY
2007年「Mess」表参道画廊
個展
2006年 2006年度コニカミノルタフォトフレミオ賞大賞
http://www.geocities.jp/ymgtsu_p/

Shin Yamagata

Toshiya Murakoshi

南條敏之 Toshiyuki Nanjo

1972年 東京生まれ。
東京芸大短期大学部写真技術科卒業
個展
2007年「suns」masumi R.D.R
2006年「suns」exhibit LIVE
グループ展
2009年「Yon / Hibiki」Hyun Gallery ソウル
2008年「Let There Be Light」Gallery Hangil ソウル
http://www.h3.dion.ne.jp/~frontar/

Toshiyuki Nanjo

Kazunisa Araki

湊 雅博 Masahiro Minato

1947年 東京都生まれ。
個展
2008年「環・fusion」UP FIELD GALLERY
2007年「累」Studio primo 2 gallery
2006年「累」UP FIELD GALLERY
2004年「第一・Border」再春閣ギャラリー
グループ展
2009年「LAND SITE MOMENT ELEMENT」UP FIELD GALLERY
2008年「Invisible moments」UP FIELD GALLERY
2007年「記憶の位相・Aspects of Memory」UP FIELD GALLERY

Masahiro Minato

Naoko Hakoyama

- DIVISION-1**
相馬 泰/西山功一/横澤進一/吉村 朗
2010年5月14日(金)～6月1日(火)

- DIVISION-2**
村越としや/山方 伸
2010年6月4日(金)～6月22日(火)

- DIVISION-3**
荒木一真/南條敏之/箱山直子/湊 雅博
2010年6月25日(金)～7月13日(火)

●ギャラリートーク (参加費¥500 ドリンク付き)

- DIVISION-1**
5月22日(土)16:00 出品作家×コボタタケオ(美術家)

- DIVISION-2**
6月14日(土)16:00 出品作家×藤千里美(東京都写真美術館 学芸員)

- DIVISION-3**
7月3日(土)16:00 出品作家×小林美香(写真研究家)

●フリートーク (参加費無料)

- 7月11日(日)16:00 「風景」に係る写真について
パネラー 相馬 泰×糸崎公則(美術家・写真家)

アップフィールドギャラリー|開催時間12:00～19:00(会期中無休)



相馬 泰
Yasushi Soma西山 功
Koichi Nishitama横澤進一
Shin-ichi Yokozawa吉村 朗
Akira Yoshimura村越としや
Toshiya Murakoshi

外界に対して、人はつねに「風景」を見ているわけではない。あらためて外界、つまり私たちをとりまく環境を風景としてとらえるには、距離をとることが必要だ。見るものと見られるもののあいだを切り離し、主体と客体を切り出すという作業をへて、はじめて風景は立ち現れる。こうした作業に、写真というメディアはとてもなじみがいい。主体である撮り手と客体となる被写体のあいだに置かれたカメラは、主体と客体を切り離し、距離をとるという構図を、ほとんど無条件に成立させる。

カメラを媒介に切り出された「風景」は、それだけですでにひとつのイメージとして成立しているが、そこではまだ、未分化な外界に対して、とりあえずの距離を確保し、ひとつの「見え」が固定されているに過ぎない。それを表象として他者に差し出すには、まだ何ものたりない。写真家が表象行為として風景をめぐるイメージを成立させるに

な読解が可能な、重層的なテクストと位置づけられるだろう。第三の方向性としては、たとえばアルフレッド・スティーガリットに始まる、「イクリュアント(=等価)」の美学が挙げられる。彼らは被写体と内面のあいだにメタフォリカルな関係性を仮構し、風景の描写を詩的なメタファーとして、精神性を象徴的に表象することを試みた。

もちろん、以上はとておおざっぱな分類であり、実際には、たとえば雄大な自然景観を録画するアンセル・アダムズのヨセミテ渓谷の写真を、地誌的・文化史的視点から読み解くことも可能だし、同様に自然景観の描写を通じたアンセル自身の精神性の表象としてとらえることも可能である。つまり、景観それ自体を美的なものとして描出するか、分析や読解の対象とするか、あるいは内面を仮託する器とするか、これらは決然と分類できるわけではなく、ひとつの写真イメージのなかに

にしても、あるいは、外界と内面の接する界面としてのイメージそのものが発する問い合わせに向かうとしても、写真家たちの仕事はそれほど単純にははされていない。そこでは同時にさまざまな問題系が参照されているからである。

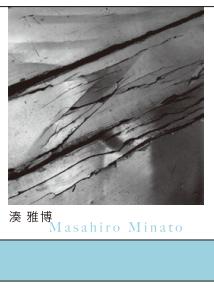
たとえば今回の出品作家の一人、吉村朗は、外界と内面の接する場としての「風景」に、記憶や歴史という問題系を交錯させる。彼の「まなざし」が見出すのは、判読しがたいほどに複層するテクストのかけられた「風景」である。吉村は一方の極とするならば、湊雅博の仕事はもう一方の極として対照されるだろう。湊は、吉村が写真という界面に招致したような問題系を一切捨象し、風景を成立させるために不可欠なはずの距離をすらもミニマルに切り詰めた果てに、それでもなお「風景」が出現しうるかどうかを見届けようとする。この二つの極のあいだに、それぞれの写真家が、それぞれ

る。そして展覧会のコンセプトが固められていく過程で、「拡張する眺め、まなざしの収束」というタイトル案があがったという。ここには「拡張」と「収束」という互いに逆方向のペタルをもつ運動性が浮上している。最終案では省略された、この視覚の二つのモードがはらむ逆方向の運動性にこそ、風景をめぐる写真家の営みが直面する今日的な課題をとらえる手がかりがあるように思う。

風景と写真をめぐるこの企画展シリーズの背景には、私たちをとりまく世界がデジタル・テクノロジーの浸透によって変容し、写真メディア自身もデジタル化によって急速に変化しているという状況があった。現実の空間をグローバルな情報のネットワークが覆っていることが、日常的に実感されるような状況において、写真というメディアを介して、リアルであれヴァーチャルであれ、私たちをとりまく状況に「風景」を立ち上げさせること。

風景と写真をめぐる今日的状況について

増田 玲 (東京国立近代美術館主任研究員)

山方 伸
Shin Yamagata荒木一眞
Kazuma Araki南條敏之
Toshiyuki Naito箱山直子
Naoko Hakoyan湊 雅博
Masahiro Minato

は、距離の取り方や視点の設定において、意識的にせよ無意識的にせよ、何らかの選択がなされる必要がある。そこでとりうる選択肢には、歴史的にみて、いくつかの基本的な方向性があったと考えられる。

まずは景観そのものの見事さ、美しさをイメージとして定着させ、その純度を高めていく方法。次に風景を分析、探査の対象とし、読み解くべきテクストとしてとらえ、新たな視点や知見を提示する方法。そしていまひとつは、切り出された風景をひとつの器として、そこに内面の思いや感情を仮託する方法だ。

第一の方向性としてはアンセル・アダムズの仕事をその完成型を見ることがある。ヨセミテ渓谷をめぐる一連の作品に代表されるアンセルの仕事は、いわゆる「風景写真」の典型である。第二の方向性は、ルイス・ボルツ・ヨラバート・アダムズら「ニュー・ボグラフィックス」の写真家を典型とする。彼らは雄大な自然を好んだアンセルとは対照的に、とりてて美的とも思えない造形などの無個性な人為的光景にこそ、レンズを向けて分析し、読み解くべき何かがあると考えた。あるいは写真家本人の意図がこれまでの射程を持っていたかは別にして、ウジェーヌ・アッジの残した膨大なパリの都市風景写真は、第三者にとってさまざま

複層するそれぞの要素が、それぞれのバランスをとって現れていると考えるほうがいいだろう。

さらにもうひとつ、風景写真のかかわりを考える上ではずせないのは、外界の側に力点を置くにしろ、内面の側を重視するにしろ、それらが定着されるイメージは、外界と内面の接する界面に結ばれているという点である。そこには人間の視覚を相対化する機械的としての写真の性質が大きく作用することになる。そうした「写真の眼」の独自性として典型的なのは、1920-30年代のヨーロッパの前衛的な写真表現に見られる、極端な俯瞰や仰角の構図など、三次元空間を二次元化する際に現われるトリッキーな視覚効果である。もちろんそこまで極端なとともに、写真イメージは、たとえわずかなものであれ、私たちの日常的な視覚に対して、問い合わせ投げかける違和感をつねに内包している。再びアンセルに立ち戻れば、彼は、ゾーンシステムというきわめて洗練されたプリント手法によって、写真という界面における違和感を、美的体験へと転化させたのである。

ここまで駆け足で確認してきたのは、いわば風景と写真について考えるための、とりあえずの枠組みのようなものだ。しかし風景に対して分析や読解を試みるにしても、被写体としての風景と内面のあいだにメタフォリカルな関係性を仮構する

に設定した問題系を参照しながら立ち上がる「風景」が布置される。とりあえず今回の展覧会の成り立ちをそのようにとらえてみたい。

個々の写真家が参照する問題系は多様であり、そこに立ち上がる「風景」もまた多様である。私たちはそれぞれの問題系のありかを注意深く見極めることを求められている。今回の展覧会について語るべきことは、以上に尽きているのかもしれない。しかしながら、2007年以來、四度にわたって継続されてきているこの企画展シリーズの蓄積を考えると、さらにここで確認しておくべきことがあるのではないかと思われる。

「記憶の位相」(2007年)、「Invisible moment」(2008年)、「Land Site Moment Element」(2009年)、そして今回の「ながめる、まなざす」。これらのタイトルはいずれも、風景と写真をめぐる仕事の現在形という大枠のうちに、参加した写真家たち自身がグループ展を成立させるための対話のなかでつむぎだしたものだという。試みに、これまでの議論に則して考えてみると、これまでの三回のタイトルは、外界や内面、あるいは参照される問題系をめぐって選ばれた言葉であると解釈できる。

それに対して今回の「ながめる、まなざす」というタイトルは、「風景」が立ち上がるプロセスにおける写真家の視覚のモードについて記述する言葉であ

今回のタイトルは、そうした試みをめぐって「身体性」というキーワードが浮上してきたことを示唆しているのではないだろうか。

ネットワークに浸透された日常において、私たちの経験は、ある意味で身体という枠を超えて限りなく拡張されている。しかしそうした経験を重ねれば重ねるほど、結局のところ、私たちの生が身体に限界づけられていることが、なかば無意識のうちに自覚されてきているのではないか。

「ながめる、まなざす」という視覚の二つのモードが示唆する逆方向の運動性、絶えず反転しながら振動するような運動性とは、そうした私たちを限界づけている生身の身体の本質である。そしてその運動性こそが、デジタル情報のネットワークの網の目からこぼれ落ちる微細なノイズを感じ、そこからかすかなシグナルをすくいあげることを可能にするだろう。実は写真というテクノロジーは、その局面で、必ずしもデジタル・ネットワークに親和的にふるまうわけでなく、むしろ生身の身体の側に位置しているのではないか。

今回の展覧会は、そうした風景をめぐる写真メディアの今日的可能性を見究めようとする、写真家たちの現状報告なのである。